

◆伊藤洋二 選 ～「諳んじたい俳句 88」～

歸り花鶴折るうちに折り殺す 赤尾兜子

「歸り花」とは、本来の季節とは異なる時季に咲く花のことで、「桜の二度咲」等とも云う。花芽は葉の休眠ホルモンの作用で冬眠するが、台風や虫害で葉を失うとその作用が狂い、花芽は休眠できずに咲くことがある。桜ちゃんは、回復祈念の千羽鶴を折りながら、虫喰枝を一気に治し、桜前線に無事復帰するのであった。

春蟬や午後はなかりし潦 岸風三樓

「潦（にわたずみ）」とは、俄かに降った雨によってできた水のことをいう。雨上がりの山道を往くと、林の中で春蟬が鳴いている。その声は、ジージージとも、ゲーキョゲーキョとも、ヨーシッヨーシッとも聞こえる。

朝日煙る手中の蚕妻に示す 金子兜太

人絹が発明されるまで養蚕は農家の重要な仕事であり、外貨獲得産業として日本の近代化に貢献した。“お蚕さん”は人の助けがないと生存出来ない“家蚕”ゆえに、一頭一頭、大切に育てられた。我が子の様な“五齡”が桑の葉をバリバリと齧っている。お蚕部屋から若夫婦の声。「この子はよく食べているね」「あら、こっちを見たわ。おはようと言ってるみたい」。

短夜や乳ぜり泣く児を須可捨焉乎 竹下しづの女

「須可捨焉乎」は「すてつちまおか」と読む。直訳すると「捨ててしまおうか」である。意識すると、須は「暫し」、可は「してもよい」、捨は「放ったらかしに」、焉は「ここに」、乎は「かな」。つまり、「ここに暫し放ったらかしにしてもよいかな」くらいの意味合いで、一安心となる。二時間毎にお乳を欲しがると初めての児をもつ若いお母さんにエール。「お疲れさん泣く児は育つ合歡の花」。

頭の中で白い夏野となつてゐる 高屋窓秋

浪曲を憶える方法の一つに、「映像化」がある。先ず台詞を丸暗記するのには書くのが一番だが、文字が“蚯蚓”では、後で読み返せない。よってパソコン

を駆使するわけだが、入力しながら、脚本家に成り切る。あるいは、演出家、自作自演の映画監督に成りきる。頭の中を真っ白にして、次の場面を記憶してゆく。

さわやかにおのが濁りをぬけし鯉 **皆吉爽雨**

錦鯉は元気ならば三十年余の寿命があり、人に慣れ易く、動く宝石と言われる。その品種は約百種。日本の国魚として「NISHIKIGOI」の名で世界中に輸出されるとか。体温は水温と同じで、段々と水温が下がり始める秋口がいちばん成長する時期である。冬に備えて食い込み、好物は蒸した安納芋。「やや寒におのが脂肪をためし鯉」。

水枕ガバリと寒い海がある **西東三鬼**

台所からは食器を洗うガシャガシャの音。タオルで捲いた水枕からは、チャプチャプの音。体温計を挟まれながら虚ろな眼を微かに開けると割烹着の白い袖口が見える。母親と先生の話し声が遠くに聞こえるなあと思いながら眠りに落ちる。肩口の冷たさと空腹で目が覚めた。「はしか見るホノリと温い指がある」。

ひく波の跡美しや桜貝 **松本たかし**

田端義夫さんの名曲、「かえり船」（作詞：清水みのる先生・作曲：倉若晴生先生）。♪波の背の背に揺られて揺れて月の潮路のかえり船♪ 筆者の第一応援歌である。年末は、波の音にあやされながら、年の終いの下り船。年始は、波の背の背に押されて押して年の初めの上り船。

まさをなる空よりしだれざくらかな **富安風生**

真っ青、真っ赤の、接頭語「真」は、次にくる言葉の意味を強調し、語勢が強くなる。「諳んじたい俳句」に密着し、味わい、十七音字を百字余りの解釈の風呂敷に広げてみることで、八十八句が如何に研ぎ澄まされた名句であるか、打ちのめされる思いである。「ましろなる峰より我のつばめかな」。

国栖人の面をこがす夜振かな **後藤夜半**

「国栖人(くずびと)」とは、古代、奈良県吉野地方にいた土着の住民のことである。「夜振(よぶり)」は夏の季語で、夜に松明を灯して寄ってくる魚を捕る

ことをいう。鮎のことを「国栖魚(くずのうお)」と云うのは、国栖人が獲って献上した故事に由来する。また、鮎の字の語源は、アユを釣って戦いの勝敗を占ったとする説や、アユが一定の縄張りを独占する(占める)ところからつけられたというものなど諸説ある。

火を投げし如くに雲や朴の花 **野見山朱鳥**

朴の白い花は、大きな葉に乗るように咲くので、見上げただけでは見えないことが多い。葉は芳しく殺菌効果があり、火にも強いので、天然の食器として利用された。夕陽に赤く燃えるような雲と、真白な朴の花の対比が素晴らしい。